

日本人は妖怪をどう捉えているか —「合理・非合理」との関連—

林 文^{†1} 吉野 諒三^{†1}

1970年代後半に林知己夫が中心となり企画した日本人の基底意識を探る調査は、「お化け調査」と呼ばれている。お化け、妖怪、超自然ともいべきものの捉え方を尋ねる質問で、社会一般の様々な意識や意見の根底をなす「合理・非合理」の考え方を捉えるものとして、その後、原子力に関する意識調査などでも用いられてきた。2000年以降、アジア・太平洋地域の国際比較調査でも用いており、国・地域の特徴についても触れる。

How the Japanese Understand the “Yokai” (ghost, monster, bogey): On Its Relationship with Rational and Non-rational Ways of Thinking

FUMI HAYASHI[†] RYOZO YOSHINO[†]

The set of survey research Chikio Hayashi and his associates have conducted in the late 1970's in Tokyo and Yonezawa to delve into such matters as the religious mind, traditional attitude, and feelings for supernatural phenomena is commonly known as the “ghost research”. It was postulated that by asking people about their feelings toward various matters regarded as “supernatural” such as ghosts and spirits, one would create a proxy measure for the degree to which a given respondent possesses a “rational” or “non-rational” mindset – which in turn is to be regarded as one of the fundamental elements of personality that influence his or her thoughts and behavior. The measurement has then been used in other surveys as those studying the attitudes toward nuclear power. After the year 2000 it has also been adopted for the international comparative surveys in the Asia-Pacific region, the notable observations of which we like to discuss in this paper by country or region.

1. はじめに

1970年代に行われた「お化け調査」とニックネームがついた調査は、社会調査における回答の本音、基底意識を捉える調査と解析を目指したもので、科研「ノンメトリック多次元尺度解析についての統計的接近」による[1]。そこでは、宗教に関する素朴な感情、いわゆる迷信に対する意識などに加えて、「お化け調査」といわれる所以となった幽霊、妖怪、人のたたり、空飛ぶ円盤などについて人々がどう捉えているかを問うた。これらの「お化け」は諸妖怪研究によると、全てが「妖怪」と言ってもよいであろう。こうしたものをどのように捉えるかはそれぞれの人の基底意識であり、社会生活上の意識・行動に「合理・非合理」の変え難い特質をとって影響を与えているのではないかという考えに基づく。

2. お化け調査の概要

ものの捉え方には、存在、期待、情緒（プラスとマイナス）の次元が考えられる。妖怪を人々がどう捉えているかを問う質問は2つの方式（A,B としよう）で調査がなされた。A方式はそれらの次元に対応した反応語を混在させて並列し、最もあてはまる反応語を選ぶ方式、Bは逆に、存在、期待、プラス情緒、マイナス情緒の4種の反応語に該当する妖怪を選ぶという方式である。このA方式は、多次元尺度解析として開発された MDA-UO を適用するデー

タとなった。一方B方式は、あえて次元を分けずに回答を取ることによって、その回答から新たに次元を構築し本質を見出すもので、その後活用された質問である。ここでは後者Bを取り上げる。

具体的な質問で取り上げた妖怪は12種類、雪男、ネッシー、空飛ぶ円盤・宇宙人、幽霊・亡霊、カッパ、妖怪、超能力・念力、人のたたり、人をのろい殺すなどの怨霊、過去や未来へ行けるタイムマシン、龍、鬼である。これらに対する反応語としては、存在の次元として、いる・ある(3)、いない・ない・ばかばかしい(7)、期待の次元として、いてほしい・あってほしい(2)、いてほしくない・あってほしくない(5)、情緒の次元はマイナスとプラス方向として、こわい・おそろしい(4)、こわくない・おそろしくない(8)、たのしい・おもしろい(6)、つまらない(1)（各選択肢後ろカッコの数字は提示順序を示す）が用意された。

実際の調査は層化二段抽出サンプルに対して面接方式で行われ、回収率は東京で81%、米沢は85%、現在では考えられないほど高率であった。当時では珍しいこの調査で見たことの一つは、これらの妖怪に「何らかの心の関わり」を示す回答（2, 3, 4, 5, 6の総合）の割合は、年齢の高い層より若い年齢層の方が高いことであった。

12種の妖怪は、回答分布の近さによる多次元尺度解析により、超能力・タイムマシン・空飛ぶ円盤・ネッシー・雪男のグループ、カッパ・妖怪・龍・鬼のグループ、人のたたり・怨霊・ゆうれいのグループに分かれることが示された。また、反応語選択回答にパタン分類（数量化Ⅲ類）を

[†] 統計数理研究所
The Institute of Statistical Mathematics

適用して得られた反応語のグルーピングでは、第1次元目で「つまらない」とその他、第2次元目で「いない」と「いる」とその他が分かれ、第3次元目、第4次元目で、「たのしい」と「こわい」が分かれ、その中間にありながら「いてほしい」「いてほしくない」がほぼ分かれている。

さらに、林知己夫は情緒的反応語から「いる・ある」を選択した妖怪の個数と、「たのしい」あるいは「こわい」を選択した妖怪の個数、「いてほしい・あってほしい」を選択した個数の組み合わせから心の関わりを類型化した(表1)。この斜体で表示した12類型の数字の順序は、心の関わりの強さを示すとした。

さらに、同調査で質問された素朴な宗教的感情や迷信が気になるという回答なども組み合わせ、非合理に心を惹かれる人の抽出が試みられた。

表1 反応語の該当個数による心の関わりの類型

		たのしい・おもしろい こわい・おそろしい	いる・ある	
			0個	1個以上
あ い っ て ほ し い ・	0個	0個	1	3
		1, 2個	4	7
		3個以上	8	10
	1個以上	0個	2	5
		1, 2個	6	9
		3個以上	11	12

3. その後の調査と国際比較調査

上記の「妖怪」への「何らかの心の関わり」は一般的社会的なもの考え方の基底意識として影響を与えるのか、その後のいくつかの調査がある。例として、1980年代の原子力発電に対する意識、がんの告知に対する意識を問う調査で用いられている[2][3]。いずれも、妖怪への心の関わりの高さは、物事を合理的に割り切る考え(賛成あるいは反対)よりも合理的には割り切れない中間的回答と結びつくことが示され、合理・非合理的考え方の背景として意味あることを表しているといえる。しかし、こうした質問を通常の一般の社会的な意識を問う調査で用いることは、違和感があるかも知れない。

吉野は、このお化け調査の意義を再考し[4]、アジア・太平洋地域の価値観国際比較研究において、日本で意義の見出されたこのお化け調査の質問を、人々を「合理派」対「非合理派(感情派)」に分類するものとして応用している。実際には、12種の妖怪から国際比較可能性を考慮した4種とし、一方、反応語はお化け調査のB方式を用いている。すなわち、

問:「超能力」や「空飛ぶ円盤」などについて、あなたはどんな感じをもちますか。1から8までの言葉をよくごらんになって、それぞれについて、あなたの気持ちにもっともピッタリする言葉を1つずつ選んでください。

とし、a. 超能力や念力、b. 空飛ぶ円盤や宇宙人、c. 龍や鬼、d. 幽霊や亡霊や呪い、の4項目について回答を求めた。

1976年の東京調査と2010年の日本全国調査[5]の結果は

表2のとおりである。東京調査と全国調査の比較を単純に論じることではできないが、あえて比較してみると、それぞれの回答割合は、妖怪にも流行があることを表していると同時に、「何らかの心の関わり」を示す割合は同程度か増加していると読み取れる。

表2 妖怪に対する反応語選択割合(%)
(1976年東京調査と2009年日本全国調査)

	1	2	3	4	5	6	7	8	その他	計	2(心の関わり合計)
	つまらない	ほいてほしい	いる・ある	こわい・おそろしい	あいてほしい	いたのしい	ばいなくない	しこわくない	その他		
雪男	14	8	7	6	4	17	32	3	8	100	42
ネッシー	10	12	7	4	2	23	23	1	18	100	48
空飛ぶ円盤・宇宙人	11	8	14	2	4	24	25	2	10	100	52
幽霊・亡霊	8	1	14	23	12	3	29	4	6	100	53
カッパ	9	8	2	3	2	23	46	1	7	100	38
妖怪	16	1	0	11	7	10	48	1	7	100	29
超能力・念力	9	9	30	0	3	20	19	0	10	100	62
人のたたり	8	1	18	23	17	0	26	2	6	100	59
人を呪い殺すなどの怨霊	8	1	6	24	19	1	33	2	6	100	51
過去や未来へ行けるタイムマシン	12	19	1	1	2	28	26	0	12	100	51
龍	11	4	1	7	4	15	46	3	9	100	31
鬼	10	2	1	9	6	13	49	4	7	100	31
超能力・念力	17	13	17	2	6	21	16	3	4	100	59
空飛ぶ円盤・宇宙人	15	14	16	3	7	18	19	3	4	100	59
龍・鬼	17	5	6	10	14	14	26	4	4	100	50
幽霊・亡霊・呪い	12	3	17	17	22	4	18	4	3	100	63

2009年の全国調査について1976年と同様の分析は用いた妖怪の違いもあるが概ね4次元までで反応語がそれぞれ分かれ、妖怪は反応語の選択割合から、近代的なa,bと古典的なc,dにまとめられた。

4. まとめ

一般的社会的な考え方との関連は、ある程度認められ、こうした一見ばかばかしい問題から見出される合理・非合理的の分類は、質問調査という枠組みにはめ込む形で取り出される人々の考え方の基底意識との関連で捉えることを可能にすると思われる。国際比較においても、妖怪の種類はそれぞれの文化に基づいており、共通化することは難しいが、今後の研究課題である。

参考文献

- 1) 林知己夫他: ノンメトリック多次元尺度解析についての統計的接近, 統計数理研究所研究リポート44, 1979.
- 2) 北田淳子, 林知己夫: 日本人の原子力発電に対する態度一時系列から見た変化・不変化, INSS Journal, No.6, pp2-23.
- 3) 日本癌病態治療研究会 QOL 班: 日本人の心とガン告知, 1996.
- 4) 吉野諒三: UFOは存在するか?—お化け調査再考「合理と非合理的の間」—, 市場調査, 273, 4-13.
- 5) 吉野諒三・二階堂晃佑編集: アジア・対j 併用価値観国際比較調査 日本2010調査報告書, 統計数理研究所研究リポート103, 2011.